
異世界でVRMMOチートハーレム

へげぞ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界でVRMMOチートハーレム

【Nコード】

N1570Y

【作者名】

へげぞ

【あらすじ】

VRMMOをしている最中に死亡した主人公。美少年の主人公は、裸で旅をすることになる。七人の美しい年頃の娘は奴隷になるのか！チートで、ハーレムな、異世界ファンタジー。中世ヨーロッパ風な旅商人と占星術師は何者なのか？とにかく、強い主人公が敵をやっつけまくるご機嫌極楽道中。チラリにポロで時々、危険。もちろん、モロもあるよ。

1、異世界で目が覚めた（前書き）

わたしの過去の連載を知っている人にはたいへん失礼ですが、これは完結することをまったく目指さない超適当不定期連載です。毎日、必ず連載されるということはまったくありません。

1、異世界で目が覚めた

<VICTORY REMEMBER MAIN MEMORY
ONLINE>

勝利は、中心記憶回路を覚えている。
略して、VRMMOである。

ぼくの名前は、チート・ハーレム。

強くも賢くもない平凡な一市民である。

場所は、異世界。

中世ヨーロッパ風といえば、わかりやすいだろうか。

行商人の父と、占星術師の母の間に生まれた十四歳の男である。

行商人の父は、オーストリリアで時計や靴を買い、フランスに運び売っている。ぼくはその手伝いをしている。

我がハーレム家は、一男一女の純愛を推奨する健全な家風である。ハーレムなどという姓をもっているため、誤解を生むことがあるが、決して、大勢の女性をはべらかせて乱痴気騒ぎをする一族ではない。

VRMMOとは、ぼくがヴァアチカンに行った時に、空中に砂で描かれた文字である。<勝利は、中心記憶回路を覚えている。> いったい、どういう意味だろうか。

ぼくにはわからず、その神秘体験を見ていた。空中に砂が文字を描く。そんなことが起こりえるだろうか。しかし、現に起こったのであり、ぼくは、VRMMOという単語をしつかりと頭に叩き込み、きっとこれは母が行う占星術に関わる天の啓示か何かだろうと思いついて、砂を手にとろうとして、手を前に突き出したところで、文字を描いていた砂がさらりとこぼれ落ちた。

2、ギルドに登録しよう(前書き)

やっぱり、王道を書いていこうと思っただです。

2、ギルドに登録しよう

ぼくは行商人の手伝いをしてひらすら働いた。学校というものに通っていないため、知識は父と母が教えてくれるいかがわしいものばかりだ。

仕事柄、算数と読み書きはできるが、それ以外はさっぱりである。我が家の大切な財産である一頭のロバに積荷を背負わせ、オーストリリアからフラランスに向けてひたすら歩く。積荷である時計や靴が荷崩れする時は、家族で総がかりで荷の整理をする。

運が悪ければ、全部の荷をバラして、一から積みなおさなければならぬ。

「我が家の蓄財は、残りわずかしかない。これで、荷が売れなければ、一家のたれ死にもありえる」

と、父はいう。

ぼくらは、長い道のりをひたすら歩いた。歩いて歩いて、歩き倒した。父の足が、歳をとっているため、脱臼している。脱臼したままの父を連れて、ぼくらは長く険しい道を歩きつづけた。道は整備されておらず、ところどころ、ロバが通れないため、長い迂回をしなければならぬこともあった。

旅先で日が暮れば、松明を灯し、毎日、行商に励む。遊んでいる時間はいつさいない。

「本場、皇帝の城下町の職人の品だよ。今なら、三割引き。買うなら今のうち。さあ、時計と靴の大売り出しだよ。いらっしやい。いらっしやい。本場、宮廷職人の作った時計と靴だよ。買うなら早いもの勝ち。今なら三割引き」

腹から声を出して、ぼくは呼び込みをする。

通りすぎる人々は、時計や靴を珍しそうに手にとってみるけど、買ってくれることはめったにない。

本当は三割引きなんてしてないし、今日限りの大安売りというわ

けでもない。

「今日は、靴が一個売れただけだな」

父がいう。

「このままでは、一家はのたれ死ぬかもしれないね。チート、もしかしたら、おまえを丁稚に出すかもしれない」

丁稚になったら、師匠や兄弟子の命令を絶対に聞かなければならず、今より苦しくつらい毎日をすごすことになるだろう。ご飯だつて、満足にもらえるかわからない。すべては師匠の命令通りに暮らすことになる。

ぼくは十四歳になるけれど、見かけるのは疲れた労働者ばかり。

「父さん、ぼくは、丁稚には行かないよ。猟師になろうと思うんだ」
「猟に使う銃や猟犬はどうやって買うつもりだ。くだらない夢を見ているんじゃない」

父さんは厳しくぼくを叱った。

3、C級クエストに挑戦だ

それから、行商の旅はつづいた。フラランスの王都まで旅をする。華の都パリについたら、きつと、少しは商品も売れるだろう。それだけを希望に、つらい旅をつづける。

歩く。歩く。荷が崩れる。荷を組みなおす。

また、歩く。歩く。

役人が関所を作っていて、通行料を要求する。

「困ったぞ。こんな高い通行料は払えない」

頭を悩ました父は、役人に、なんとかもつと安く通してくれないか頼みに行ったが、

「おまえの妻を娼婦にでもしろ。顔も醜いばあだが、ついでるものがついてればそれなりに売れるだろう。通行料を払えないものは通すわけにはいかん。無断で通った者は死刑にする」

と役人が行っている。

ぼくが噂で聞いた話では、国王はこんなところに関所をつくることを認めておらず、この領地を治める男爵が、新しい妾の屋敷を建てるためにお金が必要になり、通行料をとりたてるという重税を課すことに決めたらしい。

ぼくらに抵抗する方法はない。

ここを通れなければ、華の都パリにはつけない。

父は、

「わたしたちの持っている最高級の時計を献上します。どうか、これで通してください」

と交渉した。役人は、賄賂として時計を受けとり、ぼくたち一家が関所を通る許可を出した。

4、二階級特進でA級冒険者だあ

それからも貧しい旅はつづいた。

あまり美しくないジュディという娘と知り合ったけど、ジュディは町で花売りをしているらしい。

ぼくが黙っていると、ジュディもずっと黙っているの、何か話しかけなくてはならない。ぼくらは、お互いの身の上をあまり話したがらない。お互い、惨めな貧乏人なのだ。

「ジュディ、花は売れるかい？」

ぼくが訪ねると、ジュディはことばに詰まっているようだった。ジュディの様子がおかしい。何か、聞いてはいけないことを聞いてしまったかのようだ。

「あのね、チート、花を売っているというより、お客さんはわたしの裸を見たがるの。それで、花を買ってくれたお客さんに内緒で裸を見せるのが、わたしの本当の商売なの」

ぼくは茫然とした。

「いやらしいと思わない？ 背德的よ。きっとわたしは地獄に落ちるんだわ」

「そんなことないよ。神さまは許してくれるよ。でも、もう、裸を見せるのはやめるんだよ、ジュディ」

「あなたなんて、本当につらいことは何も知らないくせに」

ぼくは困ってしまった。ジュディは、体を売っているのだろうか。それは、法律違反だし、背德的だ。

何より、問題なのは、なぜ、金持ちだけがジュディの裸を見れるんだ。ぼくには花を買うお金がない。

「ジュディ、ぼくにも裸を見せてよ」

思い切って試してみた。そしたら、頬を平手で引っ叩かれた。「行商人の貧乏人が調子にのるんじゃないわよ」

人生とはこんなものだろうか。社会とはこんなものだろうか。

ぼくは、次の日、新しい街へ旅立ってしまったので、ジュディの
その後はわからない。

4、二階級特進でA級冒険者だあ（後書き）

この路線で、どこまで引つ張ろうか悩んだけど、お気に入りが減るようなので、そのうち、ちゃんと魔物と戦います。

5、S級になりました

華の都パパリまで半分も来た頃だろうか。盗賊に襲われた。売っていた靴を万引きしたのである。

「チート、追え」

父にいわれるまでもなく、ぼくは盗賊の後を走って追いかける。

盗賊は、ぼくより年長の若い男だ。

街角を曲がって、人通りのいないところまで追いかけると、盗賊は態度を豹変した。

ぼくに向かつて、ナイフを抜いたのである。

ぼくは素手だ。

「おれさまが靴を盗んだって証拠がどこにあるんだ？」

盗賊は、ナイフをこちらに向けたまま迫ってくる。

ぼくは焦って、とにかく、道端に落ちている石を投げた。

「痛えだろうが。やめろや、クソガキ」

盗賊も石を投げ返してきた。

ぼくの体に石が当たって痛い。あざになったようだ。

重さ二十キロはあると思われる大石を持ち上げて、ぼくは盗賊に迫った。盗賊は走って逃げて行った。

どしん。ぼくは、石を地面に落とす。

逃がしてなるか。

盗賊は、仲間と合流して待っていた。盗賊仲間は六人いる。一人で勝てるわけがない。

「だから、盗んだって証拠はどこにあるんだよ」

「その靴が証拠だ」

「これは最初からおれさまのものだぜ」
くそつ。

やられたままにいると思うなよ、盗賊どもが。

ぼくは素手で六人の男に戦いを挑んだ。

でででん、ででん、でんでん、ででん。

何を隠そうぼくの職業は、格闘家だ。行商人は父の職業で、それを手伝っているけど、ぼくは格闘家だったのだ。

「靴を盗んだのは、この右手か」

ぼくが盗賊の腕をねじり上げ、左手で、顔面に殴りを叩きこむ。

「ほわたあ」

「なんだ、こいつ、逆らうつもりだぞ。やっちまえ」

「盗賊どもに名の名はない」

六人がみんなナイフを抜いた。

「あたたたたたた、ほわたあ」

盗賊たちのナイフをすべて、素手で叩き折り、盗賊たちの足をすべて骨折させ、盗まれた靴をとり返した。

「今までに犯した悪行を悔いるがいい」

「痛え。痛えよう。歩けないじゃないかよお。医者を呼んでくれ」

「運がよければ、死なずにすむだろう」

そして、ぼくは父の店に帰った。

5、S級になりました(後書き)

まあ、ようやく、本番です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1570y/>

異世界でVRMMOチートハーレム

2011年11月2日23時09分発行